

母娘関係の変容 —現代女性小説にみる戦後の英国社会

水尾 文子 (熊本県立大学、
イギリス文学・ジェンダー研究)



1. はじめに

ここで現代英国小説と呼ぶものは、第二次世界大戦後から現在までに、英国において英語で出版された作品を指します。英国では、ブッカー賞 (The Man Booker Prize) という世界的に権威のある文学賞があり、現代英国小説の研究は、ブッカー賞受賞候補作を中心として幅広い作品を対象に行われています。ブッカー賞は、連合王国 (the United Kingdom) と呼ばれるイギリス本国のほか、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、インド、パキスタンなどが加盟している英連邦と、アイルランド国籍の著者により、前年10月1日からその年の9月末日までの期間に英語で書かれて出版 (予定を含む) された小説全てを対象とします。年によって違いますが、8月に候補作が7~16作品選ばれます。その後、最終候補5, 6作品に絞られ、10月に受賞作が決定されます。1969年に創設されたブッカー賞は、その時代の傾向をよく表していると言われます。第二次世界大戦以降、インド、パキスタン、西インド諸島などの旧植民地から移民が連合王国に大量流入し、2001年の国勢調査では、混血を含む移民出自を持つ市民が人口の12.5%を占めると報告され、その割合は、年々増加しています。その数値を反映するように、近年は、アイルランド人のほか、インド、パキスタン系などの、所謂、マイノリティ・グループの作家による小説が多く最終選考に残っています。例えば、2006年のブッカー受賞作は、インド生まれの作家キラン・デサイ (Kiran Desai) による『喪失の響き』 (*The Inheritance of Loss*)、2007年は、アイルランドの作家アン・エンライト (Anne Enright) の *The Gathering* (邦訳なし) が受賞しました。そして、去年は、インド人作家アラヴィンド・アディガ (Aravind Adiga) の *The White Tiger* というインドを舞台にした作品が選ばれました。この小説は、日本では『グローバリズム出づる処の殺人者より』というタイトルで翻訳出版され、話題になりました。最終候補には、アイルランド人やポーランド系移民の作家の作品も選ばれています。このように、

現代英国小説の研究は、イギリス本国の国籍を持つ作家に限定されず、ここで挙げたアイルランド人やインド人作家を含めた現代小説が対象となります。

出自の多様性はブッカー賞に限りませんが、他の特徴として、19世紀に時代を設定した小説が多く見られます。スタイルは様々ですが、歴史上の事件を題材にしなから、あえて注目されなかった人物に焦点をあてています。また、これまであまり描かれなかった下層階級を描く小説も増えてきました。

こういった近年の特徴にあえて共通点を見出すなら、人種・階級・ジェンダーのそれぞれにおいて、多角的な視点が提示され、これまで周縁化されてきたものを再評価しているという見方もできるでしょう。

2. 1 戦後という設定

現代英国小説を考える上で、戦後の英国社会を描いた現代女性作家の作品に、母性、そして、母娘関係がどのように表象されているかを見ていきたいと思います。今回は、戦後のイングランド北部の下層中流階級の家族を描いた、滑稽かつ波乱万丈で味わい深い小説を取り上げ、そこで展開される母娘関係を、戦後の英国の母親達に多大な影響を与えた育児について考え方の関係において考察します。

まず、時代背景について考えてみましょう。1837年から1901年まで続いたヴィクトリア朝に確立した中流階級の理想の女性像は「家庭の天使 (an Angel in the House)」でした。この用語は、コヴェントリ・パトモアが1866年に出版した同名の詩集のタイトルに由来します。中流階級の女性達は、家父長制社会体制を維持するために、献身的な良妻賢母を目指すよう教育されたのです。ヴィクトリア朝の終焉とともに、家族・ジェンダー構造は徐々に変化し、二度の世界大戦を経て、決定的な変化を被りました。その原因は、戦争による男性の欠如がもたらした家庭内での家族構成の変化と、男性の権威の相対的低下にあると考えられます。第一次世界大戦では、約75万人の男性が徴兵されたという記録 (Nicholson xiii) がありますが、戦争による父親や息子の不在によって、より多くの家庭で、母親が家族の中心的な役割を担うことになったことは想像に難くありません。また、戦後、多くの帰還兵が病んだ戦争神経症は、19世紀の家父長制社会が堅固なものとしてきた男性らしさを揺るがせたとする考えもあります。例えば、ショーウォルターは、戦争神経症の症状や原因を分析し、「世界大戦は、男らしさの危機であり、ヴィクトリア朝の男らしさの理想に対する試練になった」(171)と述べています。

更に、世界大戦前後の社会背景は、新たな価値観を提示したと見ることができます。英国の現代作家カズオ・イシグロは、度々、第二次世界大戦前後を背景に小説を書いています。あるインタビューで、その時代の魅力について次のように語っています。

私は戦前戦後という設定に惹かれる傾向がある。諸々の価値や理想が試され、自分たちの理想が、それが試される前にこうだと考えていたものとは違う、という認識を直視せざるをえなくなる、といったことに関心があるからだ。(223)

イシグロの言う「価値や理想」とは、19世紀までに構築されてきたものを指し、ヴィクトリア朝の終焉以降、次第に変遷を遂げてきた価値観が、戦争をきっかけに、急速に変動し、揺らいだことを示唆しているのでしょう。

そのような変化は、むろん、母娘関係にも影響を与えたに違いありません。では、それはどのように表れたのでしょうか？

2. 2 ケイト・アトキンソン『博物館の裏庭で』

1995年に出版されたケイト・アトキンソン (Kate Atkinson) の『博物館の裏庭で』 (*Behind the Scenes at the Museum*) という小説を取り上げます¹。ブッカー賞の選考作品には入らなかったのですが、並み居る大御所を破ってWhitbread Award of the Yearという賞を獲ったことで注目されました。ちなみに、アトキンソンの作品は、この小説以外全てが犯罪小説です。今や、彼女は、犯罪小説のベストセラー作家として、英国の文壇で確固たる地位を築いています。

さて、この『博物館の裏庭で』は、語り手ルビー・レノックスが母親の胎内に宿った瞬間の1951年から、ルビーが母親を看取る1992年までの41年間を描いています。「母親の体内に宿った瞬間から物語が始まるってどういうこと!？」と思われる方がいらっしゃるかもしれませんが、小説の始まりはこうです。「あたしはこの世に存在する! 玄関向かいの部屋の炉棚の置時計が深夜を告げるその時にお母さんのお腹に宿るのだ」(1)そして、胎児である語り手のルビーが、胎外で起きていること、例えば、妊娠が分かった時の母親の自暴自棄な反応(25)、翌

1 アトキンソンがインタビューで語った小説のタイトルの意図を考慮すると、この邦題は少し違う気がしますが、あえてここではタイトルについての議論はしません。

年、母親がルビーを分娩中に、父親はバブでビール片手に、独身だと偽って女性を引っ掛けていた（40）等と淡々と語っています。ただし、ルビーがこうした全知の語り手であるのは、胎児の時だけという設定になっています。この小説でのルビーの語りは、子供の頃を回想するという自伝的手法ではありません。後年の視点から語られる時によくあるような、後に得た知識やその後の経過について、その時点では何一つ言及されておらず、その年齢のルビーの意識での限定された思考や経験が語られます。従って、その中には、子供ながらの滑稽な勘違いや誤った知識に基づいた妄想が含まれています。

この小説のもう一つの特徴は、補注章（Footnote chapters）と呼ばれる長い注釈があることです。皆さんは、注と言えば本文よりずっと短いものとお考えだと思いますが、この小説では、本文よりも長い、注だけの章が挿入され、ルビーの曾祖母や祖母の人生や母娘関係が描かれています。物語の時間は、語り手ルビーを中心に1951年から始まりますが、注の章では、ルビーの曾祖母アリスが祖母ネルを生んだばかりの1880年代から描かれ、本文で描かれるルビーと、ルビーの先祖との間に、母娘関係、家族との関係、戦争の関わりにおいて、数々の類似点を辿ることができるのが興味深い点です。

では、ルビーと母親バンティの関係に注目してみましょう。語り手である胎児のルビーは、母親の胎内から、バンティが悩んでいる母親としての葛藤を指摘します。バンティは、完璧な母親を目指して、家事をきっちりこなし、「子供は公園で遊ばせないといけない」と書いてある育児書の「赤ちゃんの育て方」の章に従って、ルビーの姉で3歳のジリアンを公園に連れて行きます（18）。また、「店で買ったケーキなど主婦としてだらしがない証拠だ」（22）という信念の下、子供達には市販のケーキは食べさせません。バンティが考える完璧な母親とはどのようなものなのでしょうか？ここで、ルビーが生まれたばかりの新生児病棟での出来事を見てみましょう。

あたしたちは、ほとんどが人工授乳だ、口には出さないけれど、母乳を飲ませるのは何となく品がないという雰囲気がある。あたしたちはきっちり4時間ごとに授乳され、その間には、どんなに泣きわめいても何ももらえない。むしろ騒げば騒ぐほど、かえってどこかの押し入れか何かに入れられてしまう可能性が高くなる。（41-42）

とルビーは語ります。これが当時の医学的な指針です。アメリカやヨーロッパでは、衛生面や、働く女性の増加に伴う外での授乳の不便さなどから、第二次世界大戦終結頃には、ほとんどの赤ん坊が人工ミルクを与えられていたそうです（Travathan 230）。ルビーは、この授乳方法を「小包みたいな赤ん坊に乳を飲ませたらげっぷさせ、おむつを替えてまた寝かせるとあとは忘れてしまうという儀式のような授乳」（42）と言っています。つまり、バンティが目指す完璧な母親とは、育児書や医学的ガイドライン、また、社会が求める基準により構成されていると考えられます。この基準に則っていることで、バンティは、既成の価値観から外れないでいる自分でいられるのです。しかし、それは既にヴィクトリア朝的な「家庭の天使」と同じではありません。

こうした完璧な母親を志向する一方で、バンティは、母親であることに対して嫌悪感を抱いています。妊娠した最初の夜にバンティが見た夢は、ごみ箱と格闘する自分、散らばったごみを必死で片付ける自分（13）という夢でした。妊娠が分かったバンティは、「ムクの叫びみたいに声もなく口を動かす—まさか」（25）、それから、鏡に靴を投げつけます（25）。家事と育児の大変さ、家庭に無関心な夫について延々と嘆き続けるバンティの姿を胎児のルビーは観察します（14）。また、バンティがルビーを出産したばかりの新生児病棟で、産婆さんがバンティに赤ん坊を一目見せてあげようとする時のバンティの反応を語り手ルビーは次のように言います。

バンティはちらっとあたしを見て、判決を下す。「肉の塊みたいね」そしてさらに「あっちへ連れてって」と言うと、追い払うように手を振る。＜中略＞彼女はあたしのことを肉の塊とは言ったけれど、肉の種類までは言わなかった。ローラーでつぶした牛の胸肉なのか、子羊なのか。豚の肩肉なのか、あるいは名前もついていない生の血だらけの肉なのかかもしれない。ま、とにかくあたしは生まれた。（40）

バンティの無関心で否定的な母親としての態度は他にも描かれています。それでも、そこに悲壮感はありません。それは、今の引用の後半にあるようなルビーの持って生まれたユーモア故でしょう。（ルビーの滑稽さは生まれる前から発揮されていたのですが。）

このようなバンティを目の当たりにし、語り手ルビーは、胎児の頃から母親に疎

外感を抱いています。「母親がこんな名前でなかったなら、あたしももっといい暮らしができるのではないだろうか」（11）と胎内から考え、お母さんとは呼ばず、バンティと呼ぶことにします。また、バンティのゴミ箱の夢について、「あたしはもっと違う夢を見る母親が欲しい」（13）と思います。「バンティは良い母親なのだろうか？」（20）という問いをルビーは事あるごとに考えます。新生児病棟で人工授乳されながら、ルビーは、自分は間違った母親をあてがわれているに違いない（42-43）と考え、どこかに本当の母親がいるに違いないと、妄想の中で真実の母親を探し続けます（43）。ルビーが妄想の中で憧れる本当の母親とは、愛情たっぷりの「完璧な母親」、「いくらでも気前よく、濃厚なデヴォン・クリームの色をした母乳を飲ませている」（42）姿でイメージされます。つまり、ルビーもバンティとは別の「完璧な母親」像に囚われているのです。

小説では、更に、バンティが、戦争が原因で結婚を決断するに至ったことや、夫の無関心な態度など詳しく描かれていますが、ここでは省略して、次に、このバンティの母親としての葛藤を1950年代の英国社会の子育て事情と重ねて見てみましょう。

2. 3 1950年代英国の子育て事情

1950年代の英国は、子育ての考え方に新たな風が吹き込まれた時代でした。1951年に発表された早期乳幼児期の母子関係についての論文で、小児科医で精神分析家のドナルド・ウィニコットが主張した「ほどほどに良い子育て（good-enough mothering）」の考え方は、数多くの講演やラジオ番組を通じて、この時代の英国の母親達に多大な影響を与えました。それは、現在に至るまで、育児の心理学的考察だけでなく数多くの自伝に、ウィニコットのこの考え方について言及されていることから分かります²。「ほどほどに良い子育て」とは、母親が、赤ん坊の出生直後は、赤ん坊のニーズにほぼ100%応じるが、子供の成長に合わせて、手厚い保護や世話を減らしていくことで、子供の成長を促すことができる、それが子どもの成長に良いとする考え方です。ウィニコットのこのような考えは、育児書や医学的な指針に従って、完璧な母親を一生懸命目指そうとしたバンティのような母親達に、どのように映ったのでしょうか。例えば、ルビーと同じ1950年代に子供時代を

2 Carolyn Kay Steedman, *Landscape for a Good Mother: a Story* (Rutgers UP, 1987)をはじめ、自伝や育児の心理学的考察において、1950年代の母親への影響が記録されている。

過ごしたキャロリン・ステードマンは、著書の中で、彼女の母親が自ら描いた完璧な母親像を目指そうとしたが叶わず苦しんでいたこと、そして、その母親がウィニコットのラジオ講演を熱心に聴いてことから、母親が「ほどほどに良い子育て」の考え方にどんなに救われた思いがしただろうかと書いています(91-92)。ステードマンの母親と同様の思いを抱いた母親は他にもいたことでしょう。そこから考えると、「ほどほどに良い子育て」の考え方が当時の母親達にもたらした影響は、学術的な側面というよりむしろ、完璧な母親という社会からの圧力に囚われた当時の母親達の呪縛を解き、多様な価値観を肯定していることであると言えるかもしれません。

2008年10月のインタビューで、アトキンソン自身、ウィニコットの考え方に影響を受けて登場人物の名前をつけたことを明かしており、このことから、この小説の背景となった1950年代の英国の育児事情が、この小説で展開される母娘関係に何らかの影響を与えていると考えることができます。しかしながら、『博物館の裏庭で』には、ウィニコットについて一切言及してありませんし、先に述べたバンティの母親としての葛藤がなくなることはありません。従って、バンティがこの新たな子育ての可能性に影響されたと考えることは難しいと思われます。ただ、ウィニコットの育児についての考え方の普及によるもたらした多様な価値観の肯定は、この小説では、バンティと同じく完璧な母親像に囚われ、「バンティは良い母親なのだろうか？」と常に考えていたルビーに、明らかな影響を与えています。時間の都合でその部分を紹介できませんが、それは、双子の娘を持つ40歳のルビーが、完璧な母親ではなくバンティのような不完全な母親が自分には良かったのだと気付く小説最終章「贖罪」に見ることができます。続きが気になる方は是非読んでみて下さい。

3. 最後に

本発表では一部分にしか触れられませんでしたでしたが、戦後の社会背景との関係から、小説『博物館の裏庭で』を見てみました。社会変化やそれに伴う人々の葛藤が垣間見えると思います。現代の英国は、人種・階級・ジェンダーにおいて、これまでになく複雑に入り組んだ価値観が模索されています。現代英国小説は、そんな現代の英国社会を知る手がかりになると思います。

参考文献

- Atkinson, Kate. *Behind the Scenes at the Museum*. NY: Picador, 1995.
- * 日本語は、小野寺健訳『博物館の裏庭で』（新潮社、2008）を参考にした。
- . “An Interview with John Mullan.” 30 October 2008. *Guardian Book Club*.
<http://www.guardian.co.uk/books/audio/2008/oct/30/1>
- Nicholson, Virginia. *The Singled Out: How Two Million Women Survived Without Men after the First World War*. 2007. London: Penguin, 2008.
- Parker, Emma. *Kate Atkinson's Behind the Scenes at the Museum: A Reader's Guide*. London: Continuum, 2002.
- Showalter, Elaine. *The Female Malady: Women, Madness and English Culture, 1830-1930*. London: Virago P, 1985.
- Steedman, Carolyn Kay. *Landscape for a Good Mother: A Story*. New Brunswick: Rutgers UP, 1987
- Trevathan, Wenda R. “Breast-Feeding.” Carol R. and Melvin Ember, eds. *Encyclopedia of Medical Anthropology: Health and Illness in the World's Cultures; Volume One: Topics*. NY: Springer, 2003.
- Winnicott, D. W. *Playing and Reality*. 1971. London: Routledge, 2005.
- Yalom, Marilyn. *A History of the Breast*. 1997. London: Pandora, 1998.
- The Census 2001. National Statistics Online (Office for National Statistics).
<http://www.statistics.gov.uk/census/index.html>
- 池園宏「カズオ・イングロ『日の名残り』における時間と記憶」福岡現代英国小説
談話会編『ブッカー・リーダー—現代英国・英連邦小説を読む—』解文社
出版、2005。
- 巻口勇次『現代イギリスの人種問題—有色移民と白系イギリス人の多様な人種関
係』信山社、2007。